

にごりえ

樋口一葉

青空文庫

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く気だらう、押かけて行つて引ずつて来るからさう思ひな、ほんとお湯なら帰りにきつとよつておくれよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言訳しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ来る気もない癖に、本当に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて鬨をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御述懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい焼杭と何とやら、又よりの戻る事もあるよ、心配しないで呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私には技倆が無いからね、一人でも逃しては残念さ、私しのやうな運の悪るい者には呪も何も聞きはしない、今夜も又木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝癩まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとんとんと土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて

唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸もとばかりの白粉も榮えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すばすば長烟管に立膝の無沙法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の裕衣に引かけ帯は黒縹子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の処に見えて言はずと知れしこのあたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの鬚の下を搔きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと気のない返事をして、どうで来るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つてゐるに、大底におしよ巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出来る物かな、そしてあの人は赤坂以来の馴染ではないか、少しやそつとの紛雑があるうとも縁切れになつてたまる物か、お前の出かた一つでどうでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうもあんな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだと笑つてお前などはその我ままが通るから豪勢さ、この身になつては仕方がないと団扇を取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つてお

出でと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

店は二間けん間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り塩じほ景気よく、空あきびん壇か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる処もみゆ、勝手元には七輪あほを煽ぐ音折々に騒がしく、女あるじ主が手づから寄せ鍋茶なべちやわん碗むし位はなるも道理ことわり、表にかかげし看板を見れば子細おんりようりらしく御料理とぞしたためける、さりとして仕出し頼ゆきみに行たらば何とかいふらん、俄にはかに今日こんにち品切れもをかしかるべく、女ならぬお客様は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や商売がらを心得て口取りやきごかな焼肴とあつらへに来る田舎ものもあらざりき、お力といふはこの家やの一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まま至極の身の振舞、少し容貌きりようの自慢かと思へば小面こづらが憎くいと蔭かげぐち口いふ朋輩もありけれど、交際つきあつ際には存ほかの外やさしい処があつて女ながらも離れともない心持がする、ああ心として仕方のないもの面おもざしが何処ことなく冴さへて見へるはあの子の本性が現はれるのであらう、誰たれしも新開しんかいへ這入はいるほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘このお蔭で新開の光りが添はつた、抱かかへ主は神棚へささげて置いても宜いいとて軒並びの羨うらやみやみ種くそになりぬ。

お高は往來ゆききの人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて気にしても
るまいけれど、私は身につまされて源げんさんの事が思はれる、それは今の身分に落ぶれては
根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違ちがいが子がある
がさ、ねへさうではないか、お内儀かみさんがあるといつて別れられる物かね、搦かまふ事はない
呼出してお遣やり、私しのなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出す
のだから仕方がない、どうで諦あきらめ物で別口へかかるのだがお前のはそれとは違ふ、了りようけ
簡かん一つでは今のお内儀かみさんに三下り半みくだはんをも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから
源さんと一処ひとつにならうとは思ふまい、それだもの猶なほの事呼ぶ分に子細があるものか、手紙
をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうからあの子僧なまに使ひやさんを為させるが宜い、
何なんの人お嬢様ではあるまいし御遠慮ばかり申まてなる物かな、お前は思ひ切りが宜いすぎるか
らいけないともかく手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわなと言ひながらお力を見れ
ば烟管掃除に余念うつつのなきか俯うつむき向むたるまま物いはず。

やがて雁がんくび首くびを奇麗きれいに拭ふいて一服すつてポンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら
氣をつけておくれ店先で言はれると人聞ききが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手伝
ひを情夫まぶに持つなどと考かんちが違ちがへをされてもならない、それは昔しの夢がたりき、何の今は

忘れてしまつて源げんとも七とも思ひ出されぬ、もうその話しは止め止めといひながら立あがる時表を通る兵児帯へこおびの一むれ、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相変らず豪傑の声がかり、素通りもなるまいとてずつと這入るに、忽ち廊下たちまにばたばたといふ足おと、姉ねへさんお銚子と声をかければ、お肴は何をと答ふ、三味さみの音景ねよく聞えて乱舞の足音これよりぞ聞え初そめぬ。

二

さる雨の日のつれづれに表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉とらずんばこの降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂たもとにすがり、どうでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌きりようよき身の一徳、例になき子細らしきお客を呼入れて二階の六畳に三味線さみせんなしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれてその次は親もとの調べ、士族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民かと問へばどうござんしようかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあさうおもふてゐて下され、お華族の姫ひいさま様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無左法むさほうな置つきといふが有る物か、それは

小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の左法、畳に酒のまする流気りうぎもあれば、大平おほひらの蓋ふたであほらする流気もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰きまつめの極きまつりでござんすとて臆おくしたるさまもなきに、客はいよいよ面白がりて履歴たてをはなして聞かせよ定めて凄すさましい物語があるに相違なし、唯の娘あがりとは思はれぬどうだとあるに、御覽なさりませ未だ鬢まの間に角も生へませず、そのやうに甲羅は経ませぬとてころと笑ふを、さうぬけてはいけぬ、真実の処を話して聞かせよ、素性が言へずは目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君あなびつくりなさりましよ天下を望む大伴おほともの黒くろぬ主しとは私わたしが事とていよいよ笑ふに、これはどうもならぬそのやうに茶利ちやりばかり言はで少し真実しんの処を聞かしてくれ、いかに朝夕てうせきを嘘うその中に送るからとてちつとは誠も交る筈はず、良人おとこはあつたか、それとも親故ゆゑかと真しんに成つて聞かれるにお力かなしく成りて、私だとして人間でござんすほどに少しは心にしみる事もあります、親は早くになくなつて今は真実ほんの手と足ばかり、こんな者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなければ未だ良人をば持ませぬ、どうで下品に育ちました身なればこんな事して終るのでござんしよと投出したやうな詞ことばに無量の感があふれてあだなる姿の浮気らしきに似ず一節ふしさむらう様子のみゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊ことにお前のやうな別べつび

品んさむではあり、一足そくとびに玉たまの輿こしにも乗れさうなもの、それともそのやうな奥様あつ
かひ虫が好かでやはり伝でん法ぽう肌はだの三尺帯さんせきおびが気に入るかなと問へば、どうで其そこ処ちらが落おちでござりましよ、此方こちらで思おぼふやうなは先様いが嫌いやなり、来いといつて下さるお人の氣に入るもなし、浮氣うきのやうに思おぼしめし召まししようがその日送りでござんすといふ、いやさうは言はさぬ
相手のない事はあるまい、今店先で誰たれやらがよろしく言ふたと他ほかの女めが言こと伝つたでは無
いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、ああ貴君あなたもいたり穿せん索さくなさります、馴
染なはざら一面、手紙のやりとりは反古ほごの取かへつこ、書けと仰おつしやれば起証きしやうでも誓紙ちかでも
好み次第さださし上ませう、女夫めをとやくそくななどと言つても此方こちで破やぶるよりは先方さきさま様の性根じやうこんな
し、主人しゅじんもちなら主人しゅじんが怕こわく親おやもちなら親おやの言ことひなり、振向ふりむひて見てくれねば此方こちらも追おひ
かけて袖そでを捉とらへるに及およばず、それなら廃よせとてそれなりに成なります、相手あいてはいくらも
あれども一生いっせいを頼たのむ人が無いのでござんすとて寄よる辺へなげなる風情ふうせい、もうこんな話しは廃
しにして陽氣やうきにお遊あそびなさりまし、私は何も沈しんんだ事は大嫌おきらひ、さわいでさわいで騒さわぎぬ
かうと思おもひますとて手てを扣たたいて朋輩ともだちを呼よべば力ちからちやんだ分ぶんおしめやかだねと三十女の厚化こうけ
粧まが来るに、おいこの娘この可愛こい人は何なにといふ名なだと突だしぬ然けに問とはれて、はあ私はまだお
名前なを承うりませんでしたといふ、嘘うそをいふと盆ぼんが来るに焰魔えんま様へお参まりが出来できまいぞと

笑へば、それだとして貴君今日お目にかかったばかりでは御坐りませんか、今改めて伺ひに出やうとしてゐましたといふ、それは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景氣、無駄ばなしの取りやりに調子づいて旦那のお商売を当て見ませうかとお高がいふ、何分願ひますと手のひらを差出せば、いゑそれには及びませぬ人相で見ますると如何にも落つきたる顔つき、よせよせじつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、かう見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員様があります物か、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒賞だと懐中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失礼をいつてはならないこのお方は御大身の御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商売などがおありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲団の上に乗せて置きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなされまし、みなの方に祝義でも遣はしませうとて答へも聞かずずんと引出すを、客は柱に寄かかつて眺めながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大底におしよといへども、何宜いのき、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳場の払ひを取つて残りは一同にやつても宜いと仰しやる、お礼を申

て頂いてお出でと蒔散まきちらせば、これをこの娘この十八番に馴れたる事とてきのみは遠慮もいふてはゐらず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押して、有がたうございますと掻かきさらつて行くうしろ姿、十九にしては更ふけてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪い事を仰しやるとてお力は起たつて障子を明け、手摺てすりに寄つて頭痛をたたくに、お前はどうかする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がござんした、此品これさへ頂けば何よりと帯の間から客の名刺をとり出して頂くまねをすれば、何時いつの間にも引出した、お取かへには写真をくれとねだる、この次の土曜日に来て下されば御一処にうつしませうとて帰りかか客をさのみは止めもせず、うしろに廻りて羽織をきせながら、今日は失礼を致しました、またのお出いでを待ますといふ、おい程の宜い事をいふまいぞ、空誓そらせいもん文は御免だと笑ひながらさつさつと立つて階段はしごを下りるに、お力帽子を手にして後うしろから追ひすがり、嘘か誠か十九夜よの辛棒をなさりませ、菊の井のお力は鏤い型に入つた女でござんせぬ、又形ななりのかはる事もありますといふ、旦那お帰りと聞て朋輩ともだちの女、帳場の女あるじ主もかけ出して唯今は有がたうと同音の御礼、頼んで置いた車きが来しとて此処ここからして乗り出せば、家うち中表ぢゆうへ送り出してお出を待まするの愛想、御祝義ひかりの余光ひかりとしられて、後あとには力ちやん大明神様これにも有がたうの御礼山々。

三

客は結城朝之助ゆふぎものすけとて、自ら道楽ものとは名のれども実じつてい体なる処折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈強なる年頃なればにやこれを初めに一週には二三度の通ち路、お力も何処どことなく懐なつかしく思ふかして三日見えねば文ふみをやるほどの様子を、朋輩ほうばいの女子おんなども岡焼ながら弄からかひては、力ちやんお楽しみであらうね、男おとこ振ぶりはよし気前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、その時はお前の事を奥様とでもいふのであらうに今つから少し気をつけて足を出したり湯呑ゆのみであほるだけは廃やめにおし人がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たらどうだらう気違ひになるかも知れないとて冷評ひやかすもあり、ああ馬車にのつて来る時都合が悪るいから道普請もちらからして貫もらいたいね、こんな溝板どぶいたのがたつく様な店先へそれこそ人がらが悪わるくて横づけにもされないではないか、お前方ももう少しお行義を直してお給仕に出られるやう心がけておくれとずばずばといふに、エエ憎くらしいそのものいひを少し直さずは奥様らしく聞へまい、結城さんが来たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せようとて朝之助の顔を見るよりこんな事を申てゐます、どうしても

私共の手にのらぬやんちやなれば貴君あなたから叱しかつて下され、第一湯呑みで呑むは毒でござりましよと告つげ口ぐちするに、結城は真面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの厳命、ああ貴君のやうにもないお力が無理にも商売してゐられるはこの力ちからと思し召さぬか、私に酒氣さかけが離れたら坐敷は三昧堂さんまいどうのやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程々々とて結城は二言ごんといはざりき。

或る夜の月に下坐敷したへは何処どこやらの工場の一連むれ、并びんたいて甚じん九くかつぽれの騒さわぎに大方おなごの女子は寄集よまつて、例の二階の小坐敷には結城とお力の二人ふたりぎりなり、朝之助は寝ころんで愉快らしく話しを仕かけるを、お力はうるささうに生返事をして何やらん考へてゐる様子、どうかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、何頭痛も何もしませぬけれど頻しきりに持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝かん癩しやくか、いいえ、血の道か、いいえ、それでは何だと聞かれて、どうも言ふ事は出来ませぬ、でも他ほかの人ではなし僕ではないかどんな事でも言ふて宜よろさそうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつてこんな事を思ふのですといふ、困つた人だな種いろ々秘密があると見え、お父とつさんはと聞けば言はれませぬといふ、お母つかさんはと問へばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘うそでも宜いいさよしんば作り言にしろ、

かういふ身の不^{ふし}幸^{あはせ}だとか大底の女^{ひと}はいはねばならぬ、しかも一度や二度あふのではなしその位の事を発表しても子細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事がある位めくら按摩^{あんま}に探ぐらせても知れた事、聞かずとも知れてゐるが、それをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつてもつまらぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。

折から下坐敷より杯盤を運びきし女の何やらお力に耳打してともかくも下までお出^{いで}よといふ、いや行きたくないからよしておくれ、今夜はお客が大変に酔ひましたからお目にかつたとてお話しも出来ませぬと断つておくれ、ああ困つた人だねと眉^{まゆ}を寄せるに、お前それでも宜^いいのかへ、はあ宜^いいのかとて膝^{ひざ}の上で撥^{ばち}を弄^{もて}あそべば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞^きくまして笑ひながら御遠慮には及ばない、逢^あつて来たら宜^いからう、何もそんなに体裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戾^{すもと}しもひどからう、追ひかけて逢^あふが宜^いい、何なら此処へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話しの邪魔はすまいからといふに、申^し談^{だん}はぬきにして結城さん貴君に隠^{かく}したとて仕方がないから申^まますが町内で少しは巾^{はば}もあつた蒲団やの源七といふ人、久しい馴染^{なじみ}でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家^{うち}にまいまいつぶろの様になつています、女^{にようぼ}房^ぼもあり子供もあり、私

がやうな者に逢ひに来る歳としではなけれど、縁があるか未いまだに折しふし何のかのといつて、今も下坐敷へ来たのでござんせう、何も今さら突出すといふ訳ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障さわらず歸かへした方が好いのでござんす、恨まれるは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござりますとて、撥を畳に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと廻まわる、ああもう歸つたと見えますとて茫然ぼんとしてゐるに、持病といふのはそれかと切込まれて、まあそんな処でござんせう、お医者様でも草津の湯でもと薄うす淋さびしく笑つてゐるに、御本尊を拝みたいな俳やくしや優うで行つたら誰れの処だといへば、見たら吃く驚つくりでござりませう色の黒い背の高い不動さまの名代といふ、では心意気かと問はれて、こんな店で身しん上しやうはたくほどの人、人の好いいばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑をかしくも何ともない人といふに、それにお前は どうして逆の上ぼさせた、これは聞き処と客は起かへる、大方逆の上ぼ性せうなのでござんせう、貴君の事をもこの頃は夢に見ない夜よはござんせぬ、奥様のお出来なされた処を見たり、ぴつたりと御出のとまつた処を見たり、まだまだ一層もつとかなしい夢を見て枕まくら紙がみがびつしよりに成つた事もござんす、高ちやんなぞは夜ねる寐ねるからとても枕を取るよりはやく鼾いびきの声たかく、宜いい心持らしいがどんなに浦山うらやましうござんせう、私はどんな疲れた時でも床へ這はい入ると目が冴さへてそれはそれは色々の事

を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察してゐて下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふかそれこそはお分りに成りますまい、考へたとて仕方がない故人ゆゑ前ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけゆきの締りなしだ、苦勞といふ事はしるまいと言ふお客様もござります、ほんに因果とでもいふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて潜さめざめ然とするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、慰めたいにも本末もとすゑをしらぬから方ほうがつかぬ、夢に見てくれるほど実じつがあらば奥様おくさまにしてくれろ位いひそうな物だに根ねつからお声こゑがかりも無いはどういふ物だ、古風こふうに出るが袖そでふり合ふもさ、こんな商売しょうばいを嫌いやだと思ふなら遠慮なく打明うちあければなしを為するが宜い、僕は又お前のやうな氣いきでは寧氣いっせ樂らくだとかいふ考へで浮ういて渡る事かと思つたに、それでは何か理屈りくつがあつて止やむを得ずといふ次第か、苦しからずは承うりたいた物だといふに、貴君には聞いて頂かうとこの間から思ひました、だけれども今夜はいけませぬ、何故なぜ々々、何故なぜでもいけませぬ、私が我まま故こ、申まをすまいと思ふ時はどうしても嫌やでござんすとて、ついと立つて椽えんがはへ出いるに、雲なき空の月かげ涼しく、見おろす町まちにからころと駒下駄こまげたの音ねさして行ゆかふ人のかげ分明あきらかなり、結城さんと呼ぶに、何だとして傍そばへゆけば、まあ此処へお座りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つばかりの、彼子あれが先刻さつきの人のでござん

す、あの小さな子こころ心にもよくよく憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあそんな悪者に見えまするかとて、空を見あげてホツと息をつくさま、堪こらへかねたる様子は五音いんの調子にあらはれぬ。

四

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床かみゆひどこが庇合ひあはひのやうな細露路、雨が降る日は傘もさされぬ窮屈むねわりさに、足もととては処々ところどころに溝板どぶいたの落し穴あやふげなるを中にして、両側に立てたる棟割長屋、突当りの芥溜ごみためわきに九尺二間の上り框朽あががまちちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、さすがに一方口いっぽうぐちにはあらで山の手の仕合しやわせは三尺ばかりの椽の先に草ぼうぼうの空地あそび面、それが端はじを少し囲つて青紫蘇あをぢそ、ゑぞ菊、隠元豆つるの蔓などを竹のあら垣からに搦からませたるがお力が処縁はじの源七が家なり、女房はお初はつといひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お齒黒はくろはまだらに生へ次第まゆげの眉毛まゆげみるかげもなく、洗なひざらしの鳴海なるみの裕衣ゆかたを前と後を切りかへて膝のあたりは目立ぬやうに小針のつぎ当、狭帯せまおびきりりと締めて蟬表せみおもての内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大

汗になりての勉強せはしなく、揃へたる籐を天井から釣下げて、しばしの手数も省かんとて数のあがるを楽しみに脇目もふらぬ様あはれなり。もう日が暮れたに太吉は何故かへつて来ぬ、源さんも又何処を歩いてゐるかしらんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をぱちつかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の椽に持ち出し、拾ひ集めの杉の葉を冠せてふうふうと吹立れば、ふすふすと烟たちのぼりて軒場のがれる蚊の声凄まじし、太吉はがたがたと溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて来たよと門口から呼立るに、大層おそいではないかお寺の山へでも行はしないかとの位案じたらう、早くお這入といふに太吉を先に立てて源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお帰りか、今日はどんなに暑かつたでせう、定めて帰りが早からうと思つて行水を沸かして置ました、ざつと汗を流したらどうでござんす、太吉もお湯に這入なといへば、あいと言つて帯を解く、お待お待、今加減を見てやるとて流しもとに盥を据へて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さんこの子をもいれて遣つて下され、何をぐたりと為てお出なさる、暑さにでも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が待つてゐますからといふに、おおようだと思ひ出したやうに帯を解いて流しへ下りれば、そぞろに昔しの我身が思はれて九尺

二間の台処で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手伝ひして車の跡押あとおしにと親は生うみつけても下さるまじ、ああつまらぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父とつちやん脊せなか中洗つておくれと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早さつせつ々とお上りなされと妻も気をつくるに、おいおいと返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗あらひ晒さらせしきさばの裕衣を出して、お着かへなさいまして言ふ、帯まきつけて風の透すく処へゆけば、妻は能代のしろの膳のはげかかりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷ひややつこ奴やつこにしましたとて小井こじんぶりに豆腐を浮かせて青紫蘇あおむらの香かたく持出せば、太吉は何時いつしか台より飯櫃めしびつ取とりおろして、よつちよいよつちよい「は底本では「よつちよいよつちよい」と担かつぎ出す、坊主は我おれが傍そばに來いとて頭つむりを撫なでつつ箸はしを取るに、心は何を思ふとなけれど舌に覚えの無くて咽のどの穴はれたる如ごとく、もう止やめにするとて茶碗ちやわんを置けば、そんな事があります物か、力業ちからわざをする人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、気合ひでも悪うござんすか、それとも酷ひどく疲れてかと問ふ、いや何処も何とも無いやうなれど唯ただたべる氣にならぬといふに、妻は悲しさうな目をしてお前さん又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢はちざかな肴うまは甘くもありましたらうけれど、今の身分で思ひ出した処が何となりまする、先は売物買物お金さへ出来たら昔しのやうに可愛

がつてもくれませう、表を通つて見ても知れる、白粉おしろいつけて美しい衣類きものきて迷ふて来る人を誰たれかれなしに丸めるがあの人達が商売、ああ我おれが貧乏に成つたから構かまいつてくれぬなど思へば何の事なく済すましよう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、裏町の酒屋の若い者知つてお出いなさう、二葉やのお角かくに心しんから落込んで、かけ先を残らず使ひ込み、それを埋めやうとて雷神らいじん虎とらが盆ぼん筵ぎの端はしについたが身の詰り、次第に悪るい事が染しみて終しまひには土蔵やぶりまでしたさうな、当時いま男は監獄入りしてもつそう飯めしたべていやうけれど、相手のお角は平気なもの、おもしろ可笑をかしく世を渡るに咎とがめる人なく美事ごと繁昌してゐまする、あれを思ふに商売人の一徳、だまされたは此方こちの罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、それよりは氣を取直して稼かせ業ふに精を出して少しの元手こしらも拵こしらへるやうに心がけて下され、お前に弱られては私もこの子もどうする事もならで、それこそ路頭に迷はねば成りませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出来ようならお力はおろかこ小紫こむらさきでも揚あげ巻まきでも別荘べつしやうこしらへて囲うたら宜うござりましょう、もうそんな考へ事は止やめにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしう沈んでしまいましたといふに、みれば茶椀と箸を其そ処こに置いて父と母との顔をば見くらべて何とは知らず氣になる様子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸たぬきの忘れられぬは何の因果かと胸の中

かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りつけて、いや我れだとしてその様に何時までも馬鹿ではいぬ、お力などと名ばかりもいつてくれるな、いはれると以前の不出来しを考へ出してよいよ顔があげられぬ、何のこの身になつて今更何をおもふ物か、食がくへぬとてもそれは身体の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬ故小僧も十分にやつてくれとて、ころりと横になつて胸のあたりをはたはたと打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもえて身の暑げなり。

五

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく景色づくり、何処にからくりのあるとも見えねど、逆さ落しの血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと甘へる声も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりとて胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃は手打々々あわわの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをおくれと手を出したる物なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に真からの涙をごぼして、聞いておくれ染物やの辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつびいのお

六めと悪戯ふざけまわして、見たくもない往来へまで担おぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いたりようけん了り簡かんで末が遂ついにげられやうか、まあ幾歳いくつだとおもふ三十は一昨年おとし、宜いいい加減うちに家でも拵しやくへる仕し覚かくをしておくれと逢あふ度に異見いけんをするが、その時限りははおいおいと空返そら事して根ねつから氣にも止めてはくれぬ、父とうさんは年をとつて、母ははさんと言ふは目の悪わるい人だから心配をさせないやうに早く締しめてくれれば宜いいいが、私わたしはこれでもあの人の半纏はんてんをば洗濯して、股引ももひきのほころびでも縫ぬつて見たいと思つてゐるに、あんな浮いた心では何時引取つてくれるだらう、考かんへるとつくづく奉公ほうこうが嫌いややになつてお客を呼ぶに張合はあもない、ああくさくさするとて常は人をも欺だます口で人の愁しゅうらきを恨にくみの言葉、頭痛を押へて思案しあんに暮れるもあり、ああ今日は盆ぼんの十六日だ、お焰魔えんま様へのお参りに連れ立つて通る子供達の奇麗きれいな着物こつかきて小遣こづかひもらつて嬉うれしさうな顔してゆくは、定めて定めて二人揃そろつて甲斐性かひせうのある親をば持つてゐるのである、私が息子の与太郎よたろうは今日の休みに御主人から暇ひまが出て何処ゆへ行つてどんな事して遊あそぼうとも定めし人が羨うらやましかる、父とうさんは呑のみぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母はこんな身になつて恥はかしい紅白粉、よし居い処ところが分つたとてあの子は逢あひに来ておくれまじ、去年こぞ向むかふ島しまの花見の時女房にようぼうづくりして丸鬘まるまげに結むすつて朋輩ほうばいと共に遊あそびあるきしに土手の茶屋ちやであの子に逢あつて、これこれと声をかけしにさへ私の若わく成なりし

に呆あきれて、お母つかさんでござりまするかど驚おどろきし様子、ましてやこの大島田に折しごふしは時好じこうの
 花はな簪かんざしさしひらめかしてお客とを捉とらへて申じようだん談だんいふ処ところを聞きかば子心こころには悲かなしくも思おもふ
 べし、去年あひたる時今は駒こま形かたの蠟燭ろうそくやに奉公とんとしてゐます、私はどんな愁つららき事ことあ
 りとも必かならずらず辛抱しんぱうしとげて一人前ひとりまへの男おとこになり、父ととさんをもお前まへをも今いまに楽たのをばお為なせ申まま
 す、どうぞそれまで何なになりと堅氣かたきの事ことをして一人ひとりで世渡よわたりりをしてゐて下くだされ、人の女房にようばうに
 だけはならずとにゐて下くだされと異見いけんを言いはれしが、悲かなしきは女子をなごの身みの寸燐まつちの箱はこはりして一ひ
 人口とりのぐちすく過あしがたく、さりとて人の台たい処ところを這はふも柔弱からだの身体からだなれば勤まじめめがたくて、同じ憂うれき
 中なかにも身の楽たのなれば、こんな事ことして日ひを送おくる、夢ゆめさら浮ういた心こころでは無なけれど言い甲斐ひがひのない
 お袋ふくろとあの子こは定めし爪つまはじきするであらう、常とこは何なにとも思おもはぬ島田しまだが今日けふばかりは恥はか
 しいと夕ゆふぐれの鏡かがみの前に涕なみだぐむもあるべし、菊きくの井いのお力ちからとても悪魔あくまの生なれ替かりにはある
 まじ、さる子細こさいあればこそ此こ処ところの流れながれに落おこんで嘘うそのありたけ申談まうだんにその日ひを送おくつて、情なさけ
 は吉野紙よしのがみの薄物はくものに、螢ほたるの光ひかりぴつかりとするばかり、人の涕なみだは百年ひゃくねんも我われまんして、我われゆゑ
 死ぬる人のありとも御愁おんしゆ傷やさまと脇わきを向むかくつらさ他よそ処ところ目めも養やしなひつらめ、さりとて折しごふしは
 悲かなしき事こと恐おそろしき事こと胸むねにたたまつて、泣なくにも人目ひとめを恥はれば二階座敷にかいざしきの床とこの間に身みを投なげ
 して忍しのび音ねの憂うれき涕なみだ、これをば友朋輩ともだちにも洩もらさじと包かむに根こん生せいのしつかりした、氣きの

つよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蛛くもの糸のはかない処を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何処の店にも客きやくじん人入込みて都々一端歌の景気よく、菊の井の下座敷にはお店者たなもの五六人寄集まりて調子の外れし紀伊の国、自まんも恐ろしき胴間声どうまごゑに霞の衣かすみころも紋坂もんざかと気取るもあり、力ちやんはどうした心意気を聞かせないか、やつたやつたと責められるに、お名はささねどこの坐の中にと普ついつとほり通の嬉しがらせを言つて、やんややんやと喜ばれる中から、我恋は細谷川の丸木橋わたるにや怕こわし渡らねばと謳うたひかけしが、何をか思ひ出したやうにああ私は一寸無礼ちよつとじつれいをします、御免なさいよとて三味線さみせんを置いて立つに、何処へゆく何処へゆく、逃げてはならないと坐中の騒さわぐに照てちやん高さん少し頼むよ、直じき帰るからとてずつと廊下へ急ぎ足に出いでしが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて筋向ふの横町の闇やみへ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれる物ならこのままに唐天竺からてんぢくの果までも行つてしまいたい、ああ嫌だ嫌だ嫌だ、どうしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処ところへ行ゆかれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時いつまで私は止められてゐるのかしら、これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だと道端の立木へ夢中に寄かかつて暫時しばらくそこに立どま

れば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし声をそのまま何処ともなく響いて来るに、仕方がないやつぱり私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父ととさんも踏かへして落しておしまいなされ、祖父おぢいさんも同じ事であつたといふ、どうで幾代もの恨みを背負せおうて出た私なれば為すだけの事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰たれも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商売がらを嫌ふかと一ト口に言はれてしまふ、ゑゑどうなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、人情しらず義理しらずかそんな事も思ふまい、思ふたとてどうなる物ぞ、こんな身でこんな業げうてい体で、こんな宿世すくせで、どうしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞するだけ間違ひである、ああ陰気らしい何だとしてこんな処に立つてゐるのか、何しにこんな処とこへ出て来たのか、馬鹿らしい氣違じみた、我身ながら分らぬ、もうもう販かへりませうとて横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路こうぢを氣まぎらしにとぶらぶら歩るけば、行かよふ人の顔小さく小さく擦れ違ふ人の顔さへも遥はるかとほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがりゐる如ごとく、がやがやといふ声は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされ、人の声は、人の声、我が考へは考へと別々に成りて、更に何事にも氣のまぎれる物な

く、人立おびただしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは広野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、気にかかる景色にも覚えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのにと覺束なく、気が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何処へ行くとして肩を打つ人あり。

六

十六日は必らず待まする来て下されと言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不図出合て、あれと驚きし顔つきの例に似合ぬ狼狽かたがをかしきとて、からからと男の笑ふに少し恥かしく、考へ事をして歩いてゐたれば不意のやうに惶ててしましました、よく今夜は来て下さりましたと言へば、あれほど約束をして待てくれぬは不申中とせめられるに、何なりと仰しやれ、言訳は後にしまするとて手を取りて引けば次馬がうるさいと気をつける、どうなり勝手に言はせませう、此方は此方と人中を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騒ぎはげしく、お力の中座をしたるに不興して喧しかりし折か

ら、店口にておやおかへ販りかの声を聞くより、客を置ざりに中坐するといふ法があるか、販つたらば此処へ来い、顔を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階の座敷へ結城を連れあげて、今夜も頭痛がするので御酒ごしゆの相手は出来ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香に酔ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んでその後は知らず、今は御免なさりませと断りを言ふてやるに、それで宜いのか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店たなものの白瓜しろうりがどんな事を仕出しださせう、怒るなら怒れでござんすとて小女こをんなに言ひつけてお銚子の支度、来るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くない事があつて気が変つてゐまするほどにその気で附合てゐて下され、御酒を思ひ切つて呑のみまするから止めて下さるな、酔ふたらば介抱して下されといふに、君が酔つたを未だいまに見た事がない、気が晴れるほど呑むは宜いが、又頭痛がはじまりはせぬか、何がそんなに逆鱗げきりんにふれた事がある、僕らに言つては悪い事かと問はれるに、いゝ貴君なたには聞て頂きたいのでござんす、酔ふと申まをしますから驚いてはいけませぬと嬌然にっこりとして、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。

常にはさのみに心も留とどまらざりし結城の風采やうすの今宵こよひは何となく尋常なみならず思はれて、肩かのありて背のいかにも高き処より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄すこ

くて人を射るやうなるも威厳の備はれるかと嬉しく、濃き髪の毛を短かく刈あげて頸足あしのくつきりとせしなど今更のやうに眺られ、何をうつとりしてゐると問はれて、貴君の顔を見てゐますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、おお怕いお方と笑つてゐるに、申談じやうだんはのけ、今夜は様子が唯でない聞たら怒るか知らぬが何か事件があつたかとふ、何しに降つて湧いた事もなければ、人との紛雜いざなどはよし有つたにしろそれは常の事、気にもかからねば何しに物を思ひませう、私の時より気まぐれを起すは人のするのでは無くて皆心からの浅ましい訳がござんす、私はこんな賤しい身の上、貴君は立派なお方様、思ふ事は反対うらはらにお聞きになつても汲んで下さるか下さらぬか其処そこほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂きたく、今夜は残らず言ひます、まあ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑む事さかななり。

何より先に私が身の自墮落を承知してゐて下され、もとより箱入りの生娘きむすめならねば少しは察してもゐて下さろうが、口奇麗な事はいひますともこのあたりの人に泥の中の蓮はすとやら、悪業わるさに染まらぬ女子おなひがあらば、繁昌どころか見に来る人もあるまじ、貴君は別物、私が処へ来る人とても大底たいていはそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧九尺二間いっそでも極まつた良人おつとといふに添う

て身を固めようと考へる事もござんすけれど、それが私は出来ませぬ、それかと言つて来
 るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛いみそめの、いとしいの、見初みそめましたのと出鱈目でたらめのお
 世辞をも言はねばならず、数の中には真まにうけてこんな厄種やくぎを女房にようぼにと言ふて下さる方
 もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、それが私は分りませぬ、そもその最初はじめ
 から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかからねば恋しいほどなれど、奥様にと言ふて
 下されたらどうでござんしよか、持たれるは嫌なり他処よそながらは慕はしし、一ト口に言は
 れたら浮気者でござんせう、ああこんな浮気者には誰たれがしたと思召おほしめす、三代伝はつての出
 来そこね、親父おやぢが一生もかなしい事でござんしたとてほろりとするに、その親父さむはと
 問ひかけられて、親父は職人、祖父ぢぢいは四角な字をば読んだ人でござんす、つまりは私のや
 うな氣違ひで、世に益のない反古紙ほんごがみをこしらへしに、版をばお上かみから止められたとやら、
 ゆるされぬとかにて断食して死んださうに御座んす、十六の年から思ふ事があつて、生れ
 も賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出しで来た事なく、終おはりは人の
 物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常住なげ歎いたを子供の頃より聞知つておりました、
 私の父といふは三つの歳としに椽えんから落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも嫌や
 とて居職いしよくに飾の金物かなものをこしらへましたれど、氣位たかくて人愛じんあいのなければ鼻負ひいきにし

てくれる人もなく、ああ私が覚えて七つの年の冬でござんした、寒中親子三人ながら古ふるゆ裕衣かたで、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物に工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈べつついに破れ鍋わなべかけて私にさる物を買ひに行けといふ、味噌こし下げて端はしたのお銭あしを手握つて米屋の門かどまでは嬉しく駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしみて手も足も亀かじかみたれば五六軒隔てし溝どぶ板いたの上の氷にすべり、足溜あしたまりなく転こける機会はつみに手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざらざらと翻こぼれ入れれば、下は行ゆく水みづきたなき溝泥どぶどろなり、幾度いくたびも覗のぞいては見たれどこれをば何として拾はれませう、その時私は七つであつたれど家うちの内うちの様子、父ちちはは母ははの心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空からの味噌こしさげて家には帰られず、立たつてしばらく泣いていたれどどうしたと問ふてくれる人もなく、聞いたからとて買ってやらうと言ふ人は猶なほさら更なし、あの時近処に川なり池なりあらうなら私は定さだめし身を投げてしまひましたろ、話しは誠の百分一、私はその頃から気が狂つたのでござんす、販かへりの遅きを母の親案じて尋ねに来てくれたをば時機しほに家へは戻つたれど、母も物いはず父親ておやも無言に、誰たれ一人私をば叱しかる物もなく、家うちの内森しんとして折々溜息ためいきの声のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日断食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。

いひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅ひの手巾かほに押当てその端を喰ひしめつつ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり声のみ高く聞えぬ。

顔をあげし時は頬に涙の痕はみゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私はその様な貧乏人の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、今夜もこんな分らぬ事いひ出してさぞ貴君御迷惑で御座んしてしよ、もう話しはやめます、御機嫌に障つたらばゆるして下され、誰れか呼んで陽気にしませうかと問へば、いや遠慮は無沙汰、その父親は早くに死くなつてか、はあ母さんが肺結核といふを煩つて死なりましたから一週忌の来ぬほどに跡を追ひました、今居りましても未だ五十、親なれば褒めるでは無けれど細工は誠に名人と言ふても宜い人で御座んした、なれども名人だとして上手だとして私等が家のやうに生れついたは何にもなる事は出来ないで御座んせう、我身の上にも知られまするとて物思はしき風情、お前は出世を望むなど突然に朝之助に言はれて、ゑつと驚きし様子に見えしが、私等が身にて望んだ処が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つてゐるに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれやれとあるに、あれそのやうなけしかけ詞はよして下され、どうでこんな身でござ

んするにと打しほれて又もの言はず。

今宵もいたく更^ふけぬ、下坐敷の人はいつか帰りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて帰り支度するを、お力はどうでも泊らするといふ、いつしか下駄をも蔵^{かく}させたれば、足を取られて幽霊ならぬ身の戸のすき間より出る事^{いづ}もなるまじとて今宵は此^{ここ}処に泊る事となりぬ、雨戸を鎖^{とぎ}す音一しきり賑^{にぎ}はしく、後^{のち}には透きもる燈火^{ともしび}のかげも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の巡查の靴音のみ高かりき。

七

思ひ出したとて今更にどうなる物ぞ、忘れてしまへ諦^{あきら}めてしまへと思案は極^きめながら、去年の盆には揃^{そろ}ひの浴衣^{ゆかた}をこしらへて二人一処^{くらまへ}に蔵^{くら}前^{まへ}へ参^{さん}詣^{けい}したる事なんと思ふともなく胸^{むね}へうかびて、盆に入りては仕事に出^{いづ}る張^{はり}もなく、お前さんそれではならぬぞへと諫^{いさ}め立てる女房の詞^{ことば}も耳^{みみ}うるさく、エエ何も言ふ黙^{もく}つてゐると横^{よこ}になるを、黙^{もく}つてゐてはこの日が過^{すく}されませぬ、身^{からだ}体が悪^{わる}くば薬も吞^のむがよし、御医者^{ごいしや}にかかるも仕方がなけれど、お前の病^{やま}ひはそれではなしに気^きさへ持直^{もち}せば何^ど処^こに悪^{わる}い処^{ところ}があろう、少しは正^{ただ}気に

なつて勉強をして下されといふ、いつでも同じ事は耳にたこが出来て気の薬にはならぬ、
 酒でも買て来てくれ気まぎれに呑んで見やうと言ふ、お前さんそのお酒が買へるほどなら
 嫌やお言ひなさるを無理に仕事に出て下されとは頼みませぬ、私が内職とて朝から夜に
 かけて十五銭が関の山、親子三人口もお湯も満足には吞まれぬ中で酒を買へとは能く能く
 お前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日きのふからも小僧には白玉一つこしらへても
 喰べさせず、お精しょうれう霊さまのお店たなかざりも拵こしらへへくれねば御燈明おとうめう一つで御先祖様へお詫
 びまをしを申てゐるも誰たが仕業だと思ひなさる、お前が阿房あほうを尽してお力づらめに釣られたか
 ら起つた事、いふては悪るけれどお前は親不孝子不孝、少しはあの子の行末をも思ふて真
 人間になつて下され、御酒ごしゆを呑でのん氣を晴らすは一時とき、真から改心して下さらねば心元なく
 思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰あほのき向ふした
 る心根の愁つらさ、その身になつてもお力が事の忘れられぬか、十年つれそふて子供まで儲もうけ
 し我れに心かぎりの辛苦くふうをさせて、子には襤褸ぼろを下おろさせ家としては二畳一間のこんな犬小
 屋、世間一体から馬鹿にされて別物にされて、よしや春はる秋あきの彼岸ひがんが来ればとて、隣近処
 に牡丹ぼたんもち団子と配り歩く中を、源七が家へは遣やらぬが能い、返礼が氣の毒なとて、心しんせ
 切つかは知らねど十軒長屋の一軒は除のけ物、男は外出そとでがちなればいささか心に懸るまじけ

れど女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るやうなる情なき思ひもするを、それをば思はで我が情婦の上ばかりを思ひつづけ、無情き人の心の底がそれほどまでに恋しいか、昼も夢に見て 独言にいふ情なさ、女房の事も子の事も忘れはててお力一人に命をも遣る心か、浅ましい口惜しい愁らい人と思ふに中々言葉は出ずして恨みの露を目の中にふくみぬ。

物いはねば狭き家の内も何となくうら淋しく、くれゆく空のたどたどしきに裏屋はまして薄暗く、燈火をつけて蚊遣りふすべて、お初は心細く戸の外をながむれば、いそいそと帰り来る太吉郎の姿、何やら大袋を両手に抱へて母さん母さんこれを貰つて来たと莞爾として駆け込むに、見れば新開の日の出やがかすていら、おやこんな好いお菓子を誰れに貰つて来た、よくお礼を言つたかと問へば、ああ能くお辞儀をして貰つて来た、これは菊の井の鬼姉さんがくれたのと言ふ、母は顔色をかへて凶太い奴めがこれほどの淵に投げ込んで未だいちめ方が足りぬと思ふか、現在の子を使ひに父さんの心を動かして遣しおる、何といふて遣したと言へば、表通りの賑やかな処に遊んであたらば何処のか伯父さんと一処に来て、菓子を買つてやるから一処にお出といつて、我らは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つてくれた、喰べては悪るいかへとさすがに母の心を斗りかね、顔をのぞいて

猶予ゆうよするに、ああ年がゆかぬとて何たら訳の分らぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父
 さんを怠惰なまけもの者にした鬼ではないか、お前の衣類べべのなくなつたも、お前の家のなくなつた
 も皆あの鬼めがした仕事、喰くらひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を買つた喰べても能いいか
 と聞くだけが情ない、汚むじい穢せいこんな菓子、家へ置くのも腹がたつ、捨すててしまいな、捨すて
 おしまい、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵ののりながら袋をつかんで裏の空
 地へ投なげ出せば、紙は破れて軋まろび出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝どぶの中にも落込むめり、
 源七はむくりと起きてお初と一声大きくいふに何か御用かよ、尻目しりめにかけて振むかふとも
 せぬ横顔を睨にらんで、能い加減に人を馬鹿にしろ、黙つてゐれば能い事にして悪口雑言は何
 の事だ、知しつたひと 人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が悪い、馬鹿
 野郎呼はりには太吉をかこつけに我れをへの当こすり、子に向つて父てておや親の讒訴ざんそをいふ女房氣
 質たぎを誰たれが教へた、お力が鬼なら手前は魔王、商売人のだましは知れてゐれど、妻たる身
 の不貞腐れふてくさをいふて済むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の権がある、氣
 に入らぬ奴を家には置かぬ、何処へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くもない女郎めらうめと
 叱りつけられて、それはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に当つけよう、この子が余
 り分らぬと、お力の仕方が憎くらしさに思ひあまつて言つた事を、とツこに取つて出てゆ

けとまでは惨^{むじ}う御座んす、家の為をおもへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどならこんな貧乏世帯の苦勞をば忍んではゐませぬと泣くに貧乏世帯に飽きがきたなら勝手に何処なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の延ばされぬ事はなし、明けても暮れても我^おれが店^{たな}おろしかお力への妬^{ねた}み、つくづく聞き飽きてもう厭^いやに成つた、貴様が出ずば何^{どち}ら道同じ事をしくもない九尺二間、我^おれが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴様が行^ゆくか、我^おれが出ようかと烈^{はげ}しく言はれて、お前はそんなら真^{ほん}実に私を離縁する心かへ、知れた事よと例^{いづも}の源七にはあらざりき。

お初は口惜^{くや}しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込^こみあぐ上^{なみだ}る涙を呑込んで、これは私が悪う御座んした、堪^{かん}忍^{にん}をして下され、お力が親切で志してくれたものを捨てしまつたは重々悪う御座いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御座んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきてこの後^ごとやかく言ひませず、蔭^{かげ}の噂^{うはさ}しますまい故^{ゆゑ}離縁だけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲^{なかうど}人なり里なりに立てて来た者なれば、離縁されての行き処とはありませぬ、どうぞ堪忍して置いて下され、私は憎くかろうとこの子に免じて置いて下され、

謝りますとて手を突いて泣けども、イヤどうしても置かれぬとてその後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ体、これほど邪慳じやくけんの人ではなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるればこれほどまでも浅ましくなる物か、女房が歎きは更なり、遂つひには可愛かわゆき子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐かひはなしと覚悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父ととさんの傍と母かかさんと何処どこが好い、言ふて見ろと言はれて、我おらはお父とつさんは嫌い、何にも買つてくれない物と真正まっしやうちき直をいふに、そんなら母さんの行く処へ何処へも一処に行く気かへ、ああ行くともとて何とも思はぬ様子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする、男の子なればお前も欲しからうけれどこの子はお前の手には置かれぬ、何処までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何処へでも連れて行け、家うちも道具も何も入らぬ、どうなりともしろとて寐ね転ころびしまま振向んともせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいままの道楽なり何なりお尽しなされ、もういくらこの子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探ぐつて何やらの小風呂敷取とり出いだし、これはこの子の寐ね間ま着まきの袷あはせ、はらがけと三尺だけ貰つて行まする、御酒の上といふでもなければ、醒さめての思案

もありませんまいけれど、よく考へて見て下され、たとへどのやうな貧苦の中でも二人そろう双つて育てる子は長者の暮しといひまする、別れば片親、何につけても不憫ふびんなはこの子と思ひなさらぬか、ああ腸はらはたが腐た人は子の可愛さも分りはすまい、もうお別れ申ますと風呂敷さげて表へ出いづれば、早くゆけゆけとて呼かへしてはくれざりし。

八

魂たままつ祭り過ぎて幾いくじつ日、まだ盆ぼんち提燈ちようちんのかげ薄淋しき頃、新開の町を出し棺二つあり、一つは駕かこにて一つはさし担かつぎにて、駕は菊の井の隠居処よりしのびやかに出ぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、あの子もとんだ運のわるいつまらぬ奴に見入れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日あの日の夕暮、お寺の山で二人立たばなしをしてゐたといふ確かな証人もござります、女も逆上のぼせてゐた男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座ろといふもあり、何のあの阿魔あまが義理はりを知らうぞ湯屋の歸りに男に逢あふたれば、さすがに振はなして逃る事もならず、一処いっしょに歩いて話しはしてもゐたらうなれど、切られたは後袈裟うしろげさ、頬ほ先さきのかすり疵きず、頸筋くびすぢの突つき疵きずなど色々あれども、

たしかに逃げる処を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な切腹、蒲団ふとんやの時代からさ
 のみの男と思はなんだがあれこそは死し花はな、ゑらさうに見えたといふ、何にしろ菊の井は
 大損であらう、かの子には結けつ構こうな旦那がついた筈はず、取にがしては残念であらうと人の愁うれ
 ひを串じょうだん談だんに思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨うらみは長し人魂うれか何
 かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝
 へぬ。

青空文庫情報

底本：「こぼりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文芸倶楽部」

1895（明治28）年9月号

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「こぼりえ」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：岡村和彦

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

にぎりえ

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>